美しくなつかしい、日本をのせて。

# Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

11

2019 November/December

TAKE FREE

NO.56

特集

## 出羽庄内と刀剣

庄内憧憬

吉田サチ子

キルト作家


Cradle 11

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2019 November/December

令和元年11月1日発行（偶月奇数月発行）第10巻2号（通巻56号）

発行／Cradle編集局　山形県鶴岡市山王町3-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市京田2-59-3［コマツコーポレーション］電話0234(41)0012



FIDEA GROUP

酒田市／鳥海山

晩秋の白き峰　美しい鳥海山

荘内銀行

# 丙申堂と和布のキルト
# 吉田サチ子

## 丙申堂のお庭から吹き抜ける風はキルトをなびかせ、お座敷に座りその様を眺めるのは、私にとって至福の時です。

初めて鶴岡の丙申堂をお訪ねしたのは２００６年だったと思います。刺し子の収集家で作家の鈴木満子さんが、私を風間富士子さんと関係者に紹介してくださったのが、この地でキルト展をするきっかけになりました。今ほどパッチワークキルトが知られていない時でしたので、言葉だけではイメージしにくいものだったろうと思います。その年の冬に我が家にキルトを見に来てくださって、展示を快諾いただき、雛まつりの時期には打ち合わせに伺いました。丙申堂は国指定重要文化財のため、縦横２メートルもあるキルトを飾る方法を何度も打ち合わせて、お座敷に広げられるL字型の造作が決まりました。

鶴岡の地は絹産地の北限で、以前は桑畑が広がり、養蚕から製糸、製織、精練、捺染、縫製にいたる絹織物の街と聞いております。私の母方の祖父は製糸工場を営み、小さい時に母の実家に行くと、入口の広い板の間に、白い繭があふれんばかりに入った麻袋が独特の匂いと共に積んでありました。しかし、化繊の台頭と共にいつしかその匂いも消えてしまいました。鶴岡と私と絹との出会いは、そんな古にあったのかもしれません。

パッチワークキルトを始めたのは37年ぐらい前です。その頃はアメリカンパッチワークが主流で、つなぎ合わせるパターンも従来の形で縫っていました。もっと日本的なものを表現したいと思い、材料を木綿から着物の絹に変え、デザインも自由に考えて現在に至ります。和布で始めた頃はまだ作っている方がいなかったので、どのように縫えばきれいに見えるのか、試行錯誤の連続でした。古い着物地で作られたキルトは、化繊綿と絹の裏布の３層でキルティングされ、とても優しくやわらかに仕上がります。

「キルトの世界 日本のいろ・絹物語Ⅳ―和裂のメッセージ・吉田サチ子と34人展―」（2019年5月31日～6月9日、鶴岡市 旧風間家住宅 丙申堂）

丙申堂のお庭から吹き抜ける風はキルトをなびかせ、座敷に座りキルトを眺めて風に吹かれるのは、私にとって至福の時です。４年おきの展示は今回で４回目となり、「この時期を待っていました。次の４年後がまた楽しみです」と言ってくださる方もたくさんいてうれしい限りです。私の個展から始まった展示会ですが、今は生徒さんたちの素晴らしい作品も紹介でき、和布のキルトと丙申堂、釋迦堂の建物が素晴らしくマッチしてこの上ない展示会です。今年も会期を終え、展示物が撤去されると、藤沢周平の映画のワンシーンになった丙申堂には、いつもの風と静寂が戻ってきました。

よしだ・さちこ／キルト作家。キルトスクール「ハーツ&ハンズ」で故野原三輝氏に師事。東京国際キルトフェスティバルやキルトナショナル'91をはじめ国内外の展覧会で多数の受賞歴を持つ。パッチワークの技法と日本の布文化を独自に融合させ、着物地（和裂）を使った作品で、独自の世界を表現。国内各地のほか、アメリカ、フランスなどの展覧会で、和のキルト〟を発表。また現在、ヴォーグ学園東京校で和裂のキルトの講師も務める。２００７年から、鶴岡市の「旧風間家住宅 丙申堂」（国指定重要文化財）「風間家旧別邸 無量光苑釋迦堂」（国登録有形文化財）で４年おきに展覧会を開催。今年５～６月、教室作品展「キルトの世界 日本のいろ・絹物語Ⅳ―和裂のメッセージ・吉田サチ子と34人展―」が好評を博した。

10月22日、即位の礼で「三種の神器」が
天皇に継承されました。三種の一つの
「天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）」の
由緒が示す通り、「刀剣」は古来、
権威の象徴、信仰の対象として崇められてきました。
鋼を熱し、鍛錬に鍛錬を重ね、やわらかな心鉄を
堅牢な皮鉄で包むという精巧な造り。
焼きを入れ、研ぎ澄まされたその一振りは
鋭く強く、怖いほど静謐な美しさを持っています。
武器として、渾身の戦いの歴史を刻んできた刀剣。
その刀を生み出す職人たちの仕事にこそ
日本人の矜持があると思えるのです。

# YOSHIMITSU 重要文化財 短刀 銘 吉光 名物 信濃藤四郎

短刀の名手として名高い鎌倉末期の名工・吉光の作。名前の由来は徳川家康の重臣、永井信濃守尚政が所持していたことから。庄内藩主酒井家3代忠勝が求め、伝来した。刀はやや大振りで美しい地鉄（じがね）によく冴えた刃文は気品がある。刀を入れる黒漆塗合口拵（くろうるしぬりあいくちこしらえ）は長く不明となっていて昨年秋に見つかった。

致道博物館所蔵
原寸大

永井信濃守尚政を由来とする
地鉄美しく、気品ある姿

特集

# 出羽庄内と刀剣

協力＝公益財団法人致道博物館、公益財団法人本間美術館
参考資料＝『出羽国庄内藩主酒井家名宝』（公益財団法人致道博物館）、「文化財講座　日本の美術13 工芸（刀剣・武具）」より佐藤寒山著「日本刀概論」（第一法規）、塩野米松著『刀に生きる―刀工・宮入小左衛門行平と現代の刀職たち』（角川書店）、井上達雄編著『おもしろサイエンス 日本刀の科学』（日刊工業）、久保恭子監修『図解 日本の刀剣』（東京美術）、「BRUTUS No.877 わかる？ 楽しい！ カッコいい!!「刀剣」」（マガジンハウス）ほか

# 刀剣文化を守るため

**かつて日本の暮らしに深く根づいていた日本刀。近年は若い世代の愛刀家を年々増やしていますが実はその存在が危ぶまれる時代がありました。その時に日本刀の危機を救ったのが、2人の庄内人です。**

## 本間薫山

本間順治。明治37年酒田市生まれ。國學院大学在学中に刀剣鑑定学を学び、文部省国宝調査室で刀剣調査に携わる。本間美術館初代館長、日本美術刀剣保存協会2代会長、文部省美術工芸課長歴任、文学博士、古刀研究の権威。平成3年没。

## 佐藤寒山

佐藤貫一。明治40年鶴岡市生まれ。國學院大学卒業後、東京で中学校教員をしながら刀剣研究を継続。その後、文部省国宝調査室の嘱託を兼務、刀剣研究を深める。愛刀家の育成指導も行った。文学博士、剣道教士7段、新刀研究の権威。昭和53年没。

大陸から伝来した直刀が反りを帯び、日本刀に発展したのは平安末期のこと。以来日本刀は武器としてだけでなく、武士の精神的支柱や信仰儀礼の宝刀、贈答品、美術鑑賞品として、多くの人に愛されてきました。しかし太平洋戦争直後、日本中の刀を没収するとの命令が進駐軍から出されます。その時に立ち上がったのが、酒田出身の本間薫山（順治）と鶴岡出身の佐藤寒山（貫一）でした。

当時すでに中央で活躍し、古刀研究で知られていた薫山は本間家の生まれ。愛刀家である祖父や父のもと、自宅にある2千振りの刀を観て育ちました。寒山も、叔父で愛刀家の漢詩人・土屋竹雨（大東文化大学初代学長）の薫陶を受け、従兄弟の薫山とともに、日本屈指の刀剣研究家に。その2人が全国の愛刀家に呼びかけ、進駐軍を説得し、刀剣没収の撤回を実現したのです。さらに憲兵司令官キャドウエル大佐の進言で、昭和23年には全国の仲間たちと刀剣文化を守り継いでいくための「財団法人日本美術刀剣保存協会（日刀保）」を発足。初代会長に細川護立を立て、2人は常任理事に就任、その後も2代目会長を薫山が引き継ぐなど、長く刀剣文化の保護普及に尽力しました。

現在の10代会長は致道博物館館長で、旧庄内藩主酒井家18代当主の酒井忠久さんです。支部は国内外に84を有し、会員数は約4300名。事業内容は、刀剣文化の普及を目的とした刀剣博物館の運営と、刀剣を格付けして証書をつくり、その所在を明らかにする台帳づくり、刀の原材料となる玉鋼をつくる日刀保たたら（島根県）の運営、作刀や研磨・外装などの技術研修会、現代刀職者の育成など多岐にわたります。

致道博物館で今年11月7日から28日まで開催される「現代刀職展」もその巡回展の一つ。この展覧会は、現代刀匠や研師など日本刀制作に関わる全国の職人が一年の成果を競い合い、その技を公開するもので、優れた技の数々をここ庄内で目にすることができます。今に続く日本の刀剣文化と庄内は、深い縁でつながっているのです。

## 刀剣博物館

昭和43年に日刀保の付属施設として代々木に開館し、平成30年に墨田区の旧安田庭園内に新築移転した刀剣博物館。館内入り口には本間薫山と佐藤寒山の胸像が飾られている。

東京都墨田区横網1-12-9
☎03-6284-1000
開館時間 9:30～17:00
月曜休館
大人1,000円、学生500円
中学生以下無料

米軍の憲兵司令官キャドウエル大佐と（左から3番目）。右から2番目が薫山。

本間美術館では昭和43年頃から55年まで定期的に日本名刀展を開催し、国宝・重文といった名刀が並んだ。写真はその当時の展覧会パンフレット。

箱に「薫山秘宝」と書かれた鉾（ほこ）は7世紀の古代鉾で、民家の庭で発見されたという。本間美術館所蔵。

本間薫山が大名家を訪ね、所有の刀について独自に調べた調査書。本間美術館所蔵。

## 織田信長より拝領の太刀
## 踏ん張りのある豪壮な姿

**鶴ヶ岡城の三の丸、旧庄内藩主酒井家の御用屋敷地に建つ致道博物館には、国宝の太刀が二振りあります。それらの日本刀にはどのような歴史や特徴があるのか、酒井忠久館長に教えていただきました。**

# 出羽庄内の名刀

「銘真光は、あと3カ月ほど拝領が遅かったら、本能寺の変で織田信長が亡くなるわけですから、今に伝わっていませんでした。そういう歴史を鑑みるとおもしろいですよね」。そう酒井館長が話すのは、昭和28年に国宝指定された「銘 真光」です。鎌倉時代の名工・真光は、世に名高い備前国長船長光の門下。その太刀は身幅が広く、豪壮で堂々とした姿が特徴です。この名刀を信長から授かったのは、庄内藩主酒井家の祖で、徳川四天王の一人である酒井忠次。天正10（1582）年、武田軍を滅ぼした帰りに浜松の吉田城に寄った信長を、心よりもてなしたため拝領しました。一緒に渡された刀を入れる拵も国宝に指定されています。

その2年後に忠次が小牧長久手合戦での功績を称えられ、徳川家康から贈られたのが、昭和27年に国宝指定された「銘 信房作」です。信房は平安後期の古備前の刀工といわれ、その太刀は細身で腰反りが高い優美な姿。拵も同年に国宝指定されています。両刀は400年以上にわたり酒井家の家宝とされてきました。

「刀は贈呈品として行き来するので、長い歴史の中で一カ所に留まるものは多くありません。その中でも手放せないものが今に受け継がれてきました。刀は守り刀として家を守る象徴でもありましたからね」。

他にも致道博物館には、酒井家に伝わった刀が数々所蔵されています。中でも近年刀剣女子に絶大な人気を誇る「信濃藤四郎」は、天下三作の一人、吉光の作。酒井館長は「吉光の作の中でもトップレベルの短刀だと思う」と話します。また鎌倉後期の名工・備前国長船長光の作で、一字銘「光」の頭字が長いことから「鑿長光」と呼ばれる小太刀や、昭和55年の展示の際に奇怪な現象を起こしたという太刀「袖の雪」も世に名だたる名刀です。平安、鎌倉期に生まれ、動乱の戦国期を経て、現代に生きる出羽庄内の刀たち。研ぎ澄まされた輝きは、はるかなる歴史を静かに語っているかのようです。



**酒井忠久**さん
致道博物館館長
日本美術刀剣保存協会会長

昭和21年、旧庄内藩主酒井家17代当主・忠明氏の長男として生まれる。昭和52年の日刀保たたら復活火入れ式には父子で参列する。平成4年、致道博物館館長就任。平成16年、亡くなった父の跡を継ぎ、酒井家18代当主、松ヶ岡開墾場第4代総長となる。平成28年、日本美術刀剣保存協会会長就任。

## SANEMITSU 国宝 太刀 銘 真光

鎌倉時代の名工・長光門下の真光の作。鍛肌（きたえはだ）は細かく、沸（にえ）がよくつき、刃文は小丁字（こちょうじ）、互（ぐ）の目、小乱（こみだれ）などが混じって、匂いを深く敷いて小沸（こにえ）がついている。拵の金梨子地糸巻太刀拵（きんなしじいとまきたちこしらえ）は安土桃山時代の作。

## 徳川家康より拝領の太刀
## 細身で腰反りの高い優美な姿

## NOBUFUSA 国宝 太刀 銘 信房作

平安末期の古備前名工・信房の作。鍛肌は小板目の文様で、沸粉（にえつぶ）が夜空の星のように輝き、刃文にはより一層の沸が輝き、小乱の中に小丁字の文様が入る。拵の金梨子地葵紋散糸巻太刀拵（きんなしじあおいもんちらしいとまきたちこしらえ）は江戸時代の作。

★＝致道博物館所蔵

# 刀匠の仕事

**一振りの刀は、多くの職人の仕事によって完成します。研師、鞘師、柄巻師、金工など、卓越した技能の結集において「刀身」を手がけるのは「刀匠」といわれる職人です。鶴岡市出身で、山形市に鍛刀場を構える上林恒平さんは、県唯一の刀匠として、日本の刀職の一翼を担っています。**

「昔、鶴岡の街なかで、正月に刀を飾る刃物屋さんがあったんです。それが珍しくてきれいで、ずっと見ていた覚えがあります」。子どもの頃からものを作ることが好きだったという上林さんが「刀鍛冶」の職を知ったのは中学生の時。後の師となる宮入行平氏が人間国宝になったというニュースでした。「高校生になると、致道博物館の名刀展によく行きました。当時いい刀を見たことも、進路を後押ししたと思います」。

昭和42年、上林さんは宮入氏に入門。当時は門下が多く雑用ばかりで、弟子らしい仕事ができるようになったのは5年ほど経ってから。それでもやがて「宮入の三羽がらす」の一人といわれる技術を持つまでになり、10年ほどで独立します。「自分で刀を作り始めて、師匠よりよくできたと思えたものもあります。師匠は超えるべき存在、でも自分の中に居続ける。尊敬する分だけ葛藤もあって、それがものづくりの難しいところです」。師の影を抱きながら、自らと向き合い続け、その技が認められて多くの賞を受けてきた上林さん。しかしそれは本人にとって道半ばにすぎず、日々理想の刀を追い続けています。「刀は武器ですが、私が一番に惹かれたのはその美しさ。鉄の中にこれほどの美を見出せるのは日本人だけだと思います」。中でも「名刀」といわれるものは、「理屈なしにすんなり目に入る、目が弾かないもの」だと言います。「私が特に惹かれるのは古刀ですが、例えば山の稜線があってその下に里山があって、そこに雲がかかる時がありますよね。古刀の作り手たちは、そうした自然の情景を刀の中に狙ったのだと思います。刀は自分の中に理想とするイメージがないと美しい姿になりません。優れた古刀には日本の景色が映るから目にすんなり入ります。そうした刀を作りたいと思っています」。

武器として生まれ、ゆえに命を吹き込むように鍛えられ、磨き上げられた刀剣の数々。その側面には、ひたすら純なる美しさを求め続けた職人たちの魂が込められています。

材料は玉鋼(写真上)の他に、古釘などを鋼に作り替えて使う場合も。姫路城の釘など、古い時代の純度の高い鉄しか適さないという。

女性の守り刀として手がけた短刀。鞘の蒔絵塗は山桜、刀身には桜の彫刻を施している。この刀身彫刻も上林さんの作風の一つ。刀身、鞘、下げ緒などすべて各職人による総合芸術品。

鶴岡市生まれ。人間国宝の宮入行平刀匠に師事。昭和48年に文化庁の作刀承認。同60年無鑑査認定。山形市長谷堂に鍛刀場を構える。鎌倉時代に隆盛した「相州伝」に範し、森羅万象、心象風景を映し出す作風で日本の刀職文化を支えている。山形県指定無形文化財(工芸技術)保持者。

# 刀とことば

**真剣勝負、単刀直入など、「刀」が由来のことばが今も多く使われていて驚きます。最近のSNSを眺めていると、「ペンは剣よりも強し」とはよく言ったもの。**

### 相槌を打つ
師匠と弟子がタイミングよく交互に刀を打つように、話し相手に同意したり、調子に合わせたりして応えること。

### とんちんかん
相槌を打つ調子がそろうと「とんかんとんかん」、狂うと「とんちんかん」と間抜けな音に。的外れな言動や行動を指す言葉。

### 地団駄を踏む
地団駄は「地蹈鞴（たたら）」の変化。製鉄の時にたたらを踏んで炉に送風した様から、悔しがって激しく足を踏み鳴らすこと。

### 急場しのぎ
急場＝急刃。戦場で刀の刃が欠けた時に、間に合わせの刀で戦えるようにしたことから、一時しのぎでその場を切り抜けることをいう。

### 目抜き（目貫）通り
街で最もにぎやかな通り。「目貫」は華やかで、刀装具でも最も目立つ金具であることから。

### 切羽詰まる
切羽は鍔を固定する金具で、ガタつかないように詰めて鍔を守っている。身動きできないほど追い詰められた状況をいう。

### 元の鞘に収まる
仲違いなどで離れた人同士がもとの関係に戻ること。「結局、元の鞘に収まった」。

### 身から出た錆
刀身からさびが生じる様子を転じて、自らの行いによって自らを苦しめることの意味。

### 折り紙付き極め付き
「折り紙」「極め書き」はどちらも刀の鑑定書。品質が保証されたものや、定評のあることをいう。

### なまくら
「鈍ら刀」のように切れ味の鈍い様や人をいう。怠け者や意気地なし、腕前が未熟であることなどの意味。

### 立ち往生
進退に窮する意味。もとは弁慶が衣川の戦いで無数の矢を浴びながら薙刀をつき仁王立ちで絶命した「弁慶の立ち往生」から。

### 抜き差しならぬ
刀がさびて鞘から抜けない、また、刀を抜いても抜かずとも問題になるような状況から、身動きが取れない、行き詰まっていること。

### 焼きを入れる
作刀の「焼き入れ」は、刀身を熱して急冷し刃を硬くする作業。たるんだ気持ちを引き締める意味を持つ。

### 太刀打ち
太刀で打ち合い戦うように、張り合って競おうとすること。「あのチームには太刀打ちできない」など。

### 鎬を削る
鎬の部分が削れるほど激しく斬り合うことから、互いに一歩も譲らない勝負の様子をいう。「鍔ぜり合い」も同義。

### 抜き打ち
前触れも予告もなしに物事を行うこと。刀をいきなり抜いて切りかかる様。

### 焼きが回る
焼き入れの火が入りすぎて、かえって刃の切れ味が悪くなるように、鈍くなったり、腕が落ちたりと衰えてしまうこと。

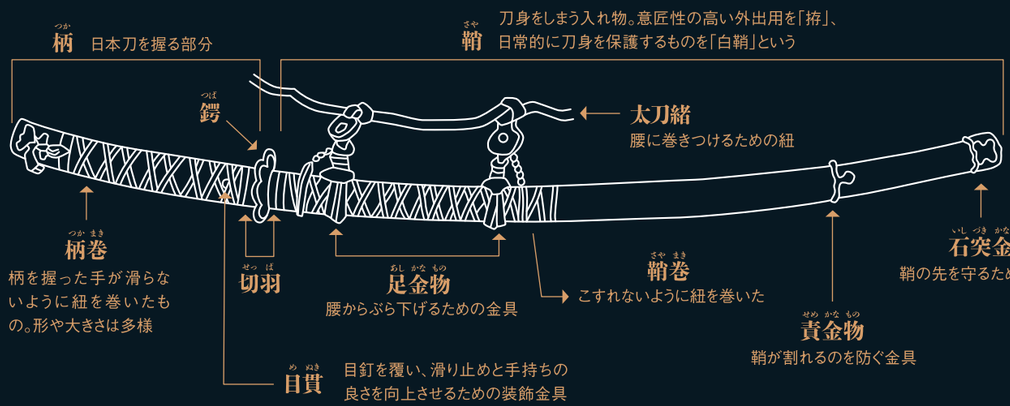
### 付け焼き刃
切れ味の悪い刀に鋼を焼き付けても使い物にならないことから、間に合わせの知識や技術をいう。

### 諸刃の剣
刀の両辺に刃のある剣。相手を斬ろうとすると自分も同等の打撃を負いかねないという意味のことわざ。

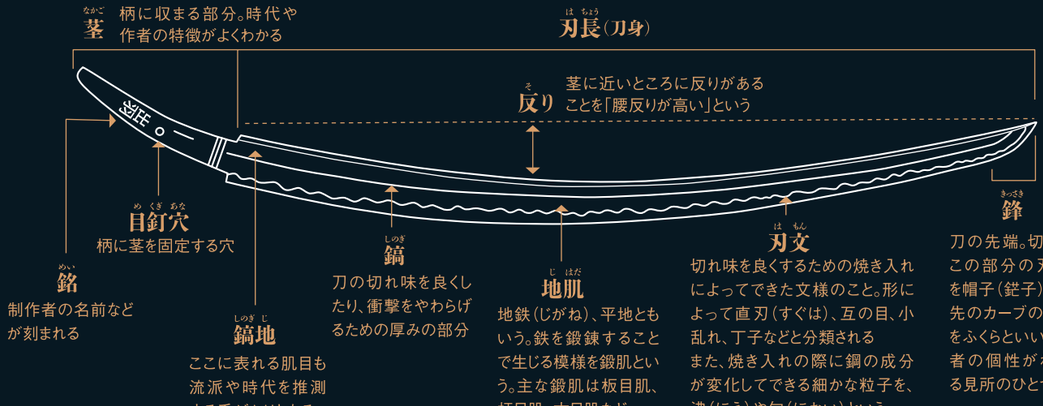
### 反りが合わない
刀はそれぞれの反りに合わせて鞘が作られるため、元の鞘以外の鞘とは合わないことから、相性が合わないという意味。

### 伝家の宝刀
家宝として伝えられてきた名刀のように、いざという時に持ち出す切り札、奥の手。

## 太刀拵




## 太刀



庄内写真季行 37

鶴岡市・大山

# 夜行性の水鳥、コガモが日中、大山上池下池で羽を休め、仲間とじゃれあう。

日本に来るコガモはカモの仲間で一番小さい。その小さな体で広大な海を渡り、翌年の5月頃まで水辺で過ごす。

大山の上池下池に群れているコガモは日中眠気に誘われながら羽の手入れをする。時折時間を持て余すかのように、仲間同士で小競り合いもする。そして池に暗闇が迫る頃、急に活気づいて、クックックと田んぼの落ち穂を食べに飛び出し、一晩中動き回って腹ごしらえをして早朝帰ってくる。コガモは夜行性の水鳥なのである。

写真・文＝太田 威

Cradle's Choice

55

# 山形大学のあらびきウインナー

最近、酒田・鶴岡の特定スーパーで
目にするようになった畜産加工品は
単なる大学ブランド商品ではない！
地方を救う一大プロジェクトだ！

日本の食料自給率の低さが叫ばれている昨今。朝食で定番のウインナーやハム、ベーコンは80％以上が輸入豚肉だと知っているだろうか。仮に国産だとしてもエサとなる飼料原料の多くは輸入品。つまり日本では、１００％国産でできている畜産加工品がほぼ皆無なのである。

この点に問題意識を持ち、生産から流通まですべてを地域内循環させようという取り組みが、４年前に山形大学農学部を中心に始まった「スマート・テロワール」である。開発品第１号となる畜産加工品は、構想に賛同する地元事業者らと連携して進められた。飼料用の農産物栽培は月山高原で畑作をしている野菜農場叶野とべジパレット、養豚は鶴岡の太田産商と羽黒の加藤畜産、加工は鶴岡の東北ハム、販売は酒田のト一屋と主婦の店鶴岡店が担うという異業種チームだ。食品ロスを考慮して今は生産数を限定しているが、今後じゃがいもや大豆、小麦を使った農産物の加工品が軌道に乗れば、その余剰品や規格外品を使った飼料が増え、飼養できる豚も増え、結果、流通量も拡大するという。そしてそれらを庄内人が進んで食べ支える。この輪の広がりが庄内の食料自給圏を実現する鍵となり、日本の農村社会を灯す光となり得るのだ。

で、肝心の味である。自信作だというあらびきウインナーは「一番人気のナショナルブランド商品を超える」を目標に市場調査と改良を重ねただけあって、想像以上の味わいだ。しかもお財布にやさしい。となれば今年のふるさと食品コンクールで山形県知事賞を受賞したのも、至極当然。

スマート・テロワールの提唱者はカルビー元社長の松尾雅彦さん（昨年2月逝去）。畜産加工品はト一屋みずほ通り店と主婦の店パル店で販売している。納品日は毎月第2・4金曜日。大豆を使った「庄内スマート・テロワールみそ」は昨年12月から販売がスタート。小麦の加工品はラーメン店と麺を開発中。

庄内スマート・テロワール推進協議会
0235-24-2278

（取材・文　長谷川結）

庄内俳句紀行

# 水澄む歴史の里清川を歩く

最上川の両岸が錦繍に染まる前
金色の芒（すすき）が大袈裟に舞い、白鳥の第一陣が
稲刈りを終えた田んぼで落穂を拾う。

最上川と蘭山

国道47号を新庄方面へ走ると、最上川と立谷沢川が合流する場所に河原が広がり、最上川にかかるさみだれ大堰が目に入る。対岸の蘭山（あらんざん）は、ようやく色づき始めていた。今年、旧清川小学校跡に「荘内藩清川関所」が復元された。清川は、かつて最上川舟運で栄えた宿場町であった。松尾芭蕉は「おくのほそ道」の道中ここで舟を降り、添川から手向（とうげ）、羽黒山へ向かったといわれる。足元に曼珠沙華（まんじゅしゃげ）を咲かせた翁像が出迎えてくれた。

## 清川や怒号はるかに若葉風
—陶山芳子

一碧の空の下、黄金の芒は頭を揺さぶるように舞っていた。清川では年間を通して、日本三大悪風といわれる「清川だし」が吹く。関所跡から、庄内藩が防風林として植えたという御殿林へ入り、散策道を歩く。風の音も、近くを走る国道の車の音さえもなく、そこには静かな時間が流れていた。林床には溝蕎麦（みぞそば）、蓼（たで）の花と一緒に、黄釣船（きつりふね）が一面に咲いている。清川を守ってきた防風林は、戊辰戦争の戦場となった際、激しい銃撃戦から庄内藩の兵士を守ったといわれる。

## まるく吹く風を味方に秋の蝶
—とりうみかづき

林を抜けると、明治維新の魁、清河八郎の像が鎮座する清河神社に着く。八郎はこの村に生まれ、18歳で江戸に出た。その人物史は、近くの清河八郎記念館で紐解くことができる。神社の前を過ぎると、大きな水路に水が流れていた。400年前、荒野だった庄内平野の中〜南部に、北館大学助利長は大水路を完成させた。

線路沿いの曼珠沙華

## 田園に黄金振り撒き風の秋
—大川孝

庄内平野の礎となったこの「北楯大堰」は、世界かんがい施設遺産に登録されている。

堰に沿って「御諸皇子神社（ごしょのおうじ）」へ向かった。金剛力士像の迎える山門を抜け、報恩坂を上る。足元の葉陰は風と共に揺れ、木々のざわめきを聞きながら本殿に至る。ここは、源義経が一夜を明かした場といわれる。風の音を聞き、義経は何に想いを馳せたのだろうか。

明治維新と鉄道の開通は、清川の風景を変えた。神社の鳥居の真ん前を線路が走り、横切る風に両脇の芒が応える。曼珠沙華はそこにも咲いていた。

## 風の棲む里の駅舎の曼珠沙華
—あべ小萩

北楯大堰の豊かな水に、その流れの先の庄内平野を思い、悠々とした最上川の水筋を眺めていると、芭蕉が説いた「不易流行」、かわらざるものはながれゆくもの、に辿り着く。先人が残してくれたものに感謝し、次の世代に私たちが何を残すべきか、歴史と向き合いこの先を考える時間を与えてくれた。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）

北楯大堰

御殿林と黄釣船

清川歴史公園　荘内藩清川関所

季語
**水澄む**（みずすむ）
秋はあらゆる水が美しく澄むころで、秋らしい景色をいう。